

## ザンビアに暮らしてみても

北海道大学ルサカオフィス 池見 真由

私が仕事でザンビアに来たのは 2013 年で、アフリカとの関わりはちょうど 10 年目になりました。しかし、アフリカといっても、周知の通り計 54 ヶ国に及ぶ雄大な大陸と島で構成され、植民地時代から波乱の歴史をもちながらも根強い文化、慣習、民族、言語の多様性に、豊かな自然、動物、そして時代の急速な変化の中でたくましく生きる人々…これら全てが国や地域によって異なるアフリカの特徴や魅力を、私もまだまだ探索、勉強中です。

そんな私は現在、北海道大学海外拠点の一つであるルサカオフィスで仕事をさせていただいています。北大ルサカオフィスはザンビア大学獣医学部内に 2012 年 8 月に設置され、親切でフレンドリーな教職員の方々と日々触れ合いながら過ごしています。オフィスの窓からはザンビア国の形をした噴水池のある素敵な中庭と、そこで勉強やおしゃべりを楽しむ学生たち、綺麗な小鳥や日本では珍しい白色胴体のアフリカン・カラスに、夜行性にも関わらず日中も元気に現れるフクロウなどが見られます。獣医学部



は動物診療所も隣接していて、犬や猫、牛などにも毎日会えます（アフリカといえば、ライオン、キリン、ゾウなどを期待したくなりますが…笑）。さらに大学キャンパス内にも関わらず一般住民も暮らしていて、家の外で料理や洗濯、水浴び、髪結い、子供たちの遊んでいる様子や木陰での家族団欒といった人々の生活も垣間見ることができます。



ザンビア大学は、同大学獣医学部が北大獣医学部と 1991 年に部局間交流協定を結び、その後 20 年に亘り協力事業や学術交流を通じて友好な関係を築きながら、2011 年に大学間協定が締結されるに至っています。私がザンビアで仕事を始めて以来色々な方々と

話をさせていただく中で感じたことが、意外なザンビアでの北大の知名度でした。私が想像していた以上に多くの方が北海道大学という名前を知っていて、その教職員や研究者の名前、さらにザンビアでの活動内容や実績についても語る人が結構いらっしゃって驚きました。今までザンビア大学やザンビア政府、JICA、日本大使館などと連携しながら多くの関係者をご活躍なさり、ザンビアに貢献し続けてこられたんだなあと感心、尊敬の念を抱きました。お陰で、私も頑張らなくてはいけなくて気が引き締まりました。





他のアフリカ国の農村部と都市部で仕事をさせていただいたことがある私が感じたもう一つの意外な点が、ザンビア人の中には遅くまで居残りあるいは週末も職場（大学）に来て一生懸命仕事をする人も結構いるんだなあ…という点です。しかし、それ以外は一般的に私自身（そして皆さん）の予想通り、日本人のように、自分の仕事はさておき先ずは人のために仕事をする、周りに気配りしながらせっせと働く、といったことはあまり見られないように感じます。逆に、のんびりと自分のペース

で働いていて、例えば約束を守らない、遅れる、忘れる、約束自体が消えてなくなる…が大半です（笑）。

日本人からよく聞かれるザンビアに対する印象・評価はやはり、他のアフリカ国よりも比較的「平和」「安全」「きれい」「気候が住みやすい」、また国民性が比較的「おとなしい」「穏やか」ではないでしょうか。勿論これらが正解とは言い切れませんが、全てではないですし例外もありますが、概ね私もそう思います。西アフリカの国セネガルで2年間暮らしたことがあります。気候は決して住みやすいとは言えず、雨季はサウナの如く汗だくになって大発生する蚊と闘う暑さ、乾季はオープンスの如く体内水分を奪われながらジリジリと焼かれていく暑さでした。それに比べてザンビアでは厳しい暑さはそう長くは続かず、昼間は気温が上がりますが年間を通して心地よい温かさとしずさが続く住みやすい気候と言えます。街並みも、例えばセネガルの首都ダカールでは建物や道路状況はルサカ程整っておらず、ルサカ市内のメインロードだけを見れば「きれい」という印象を持っててもコンパウンドに行けば衛生環境の悪さを目の当たりにしますが、ダカールでは街全体の至る所でそれが見られます。どちらかというところ「ごちゃごちゃ」という印象です。Manda Hillのような、広い土地に大きな駐車場が完備された立派なショッピングモールなどありません。

国民性については、あのエネルギーでアグレッシブでフレンドリーにも程がある（笑）セネガル人の人柄が、穏やかなザンビア人と毎日過ごしていると今ではなんだか懐かしく、愛おしくさえ感じます。ザンビアではルサカで仕事をしている都市暮らしの私ですが、地方や農村を訪れたことも何回もあり、特に子供たちがとても素直で可愛いです。元気で明るい中でも謙虚やシャイなところがあり、セネガルの村に住んでいた時の経験と比べると「おかねちょうだい」と言われる機会が数十分の一以下です（笑）。



ザンビアでの仕事の話に戻らせていただきますが…、北大は2012年5月時点で世界47の国・地域の大学や研究機関と291もの協定を結んでいます。そのうちアフリカでの協定はまだ7しかありません。しかしながら2013年6月に開催された第5回アフリカ開発会議（TICAD V）を受けて、教育部門においても日本のアフリカ進出や交流の期待は確実に高まっています。同年2月にはルサカオフィス開設以来初のアフリカ国での大学間協定締結を、ザンビアのコッパーベルト大学と実現しています。2014年には南アフリカのノースウェスト大学との協定締結を予定しており、このように北大ルサカオ

フィスはザンビアのみならずアフリカ諸国全体を対象に、各大学・研究機関との協定締結や学術交流を通じて、北大そして日本とのネットワーク開拓・拡大に向けて取り組んでいます。



その一方で、地元ザンビアでは日本の教育、特に日本語教育の普及と定着を目標に活動を始めています。その一つに、日本大使館支援の下でザンビア大学との共同企画による日本語コースを開設しました。日本語を教える先生はザンビア大学人文社会学部の講師で、日本に4年間留学して博士号を取得した優秀な元国費留学生でもあり、帰国後も日本人や日本の文化を大事にしている大変頼もしい方です。さらに、日本語コースの教育支援として学習教材用タブレット端末が、東芝ヨハネスブルグ事務所より寄贈されました。

このように、日本の政府、大学、企業からの協力を得ながら、ザンビアでの日本語教育が今後どのように展開していくのかはまだ模索の段階ですが、この日本語コース開設が、その意義ある発端に繋がることを願っています。

ザンビアの学生あるいは教職員、技術者、男性女性に関わらず日本留学への関心は少なくなく、北大ルサカオフィスにも絶えず問い合わせが来ます。ザンビアでは日本に対する評価が高く好意的な印象を持たれていることに加え、日本の素晴らしい教育環境でより高度な研究や技術を学びたいという声をよく聞きます。チャンスがあればと、多くのザンビア人が若者から大人まで望んでいることが、工作中だけでなく日常生活の中でも度々伝わってくるがあります。



日本はザンビアに対して、当国が抱える色々な問題に取り組み、改善や解決に向けて様々な支援事業や開発援助を行ない、インフラや農業、衛生、医療、教育など様々な分野で活躍しています。またこれと同時に、ザンビアの人々に対して、日本への興味関心や理解を深めてもらうことや、学術交流の機会をもっと増やしたり、将来的に日本に貢献する人材の育成に繋がる活動を推し進めていくことも、日本とザンビアの両国にとって大変有益なことであると思っています。

(2014年1月20日)